The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 石濱文庫所蔵の桑原隲藏書簡 : マルコ・ポーロの「キンサイ＝行在」説をめぐって |
| Author(s) | 堤, 一昭 |
| Citation | 待兼山論叢. 文化動態論篇. 2012, 46, p. 1-20 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/27237 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

［資料紹介］

# 石濱文庫所蔵の桑原隲藏書簡

## ── マルコ・ポーロの「キンサイ＝行在」説をめぐって ──

堤　　一　昭

**キーワード**：石濱文庫，石濱純太郎，桑原隲藏，マルコ・ポーロ，キンサイ

### まえがき

本資料紹介は、石濱文庫で発見された桑原隲藏（じつぞう）から石濱純太郎にあてた書簡を紹介するとともに、その背景、および石濱をめぐる学術ネットワークと日本におけるマルコ・ポーロ研究の展開との関わりを考察しようとするものである。

石濱文庫とは、大阪を拠点とした東洋学者・石濱純太郎（1888-1968）の旧蔵書を中心としたコレクションで、大阪大学外国学図書館（旧大阪外国語大学附属図書館）に所蔵されている。[1)] 石濱純太郎は、漢学から出発し、東洋言語学・歴史学へと学問の幅を広げ、西夏文字の研究など当時の東洋学の最先端分野の研究に携わった。彼が創設当初の大阪外国語学校蒙古語部にも学び、また1946年から長らく出講した縁によって、没後に大阪外国語大学が全蔵書・資料を受け入れた。10年をかけ整理された4万冊以上にのぼる図書・雑誌については、『石濱文庫目録』[2)]（1979）により、その概要を知ることができる。だが、それら以外の拓本や写真などの研究資料および書簡類などは、全体で1万点をはるかに超え、現在もまだ整理途上にある。

東洋史学を専門とする筆者は2004年頃より、石濱文庫のおもに拓本資

料の調査・整理に携わってきたが、文庫資料の多彩な内容と価値に鑑みて、学際的な研究の必要性を強く感じてきた。幸い2011年度、筆者ほか文学研究科内外の10名の教員による文学研究科共同研究「石濱文庫の学際的研究 ── 大阪の漢学から世界の東洋学へ ── 」が認められた。文庫中のいくつかの資料群の概要、またその中の貴重資料、全面的な調査へむけての重点事項・必要物品等を見極めることを目的として、14回の実地調査を行い、年度末に成果報告書を刊行することができた。[3)]

2012年度にも文学研究科共同研究「東洋学者・石濱純太郎をめぐる学術ネットワークの研究」が採択され、昨年度の成果に基づき、さらに学術史的な価値の高い資料群（書簡類、抜刷、拓本等）を調査・分析して石濱及びその収集資料をめぐる学際的かつ国際的な学術ネットワークを明らかにする作業に取りかかっている。

今年度の調査の重点の第一は書簡類である。これまで書簡で紹介されたのは、加藤九祚・生田美智子の両氏による、石濱と親交があったロシア・ソ連からの東洋学者ニコライ・ネフスキーからのもの、岡崎精郎氏による中国文学の青木正児、民族学の高橋盛孝、東洋学の石田幹之助からのものなどごく一部に過ぎない。[4)] すでに葉書のうち六千通あまりが差出人別に整理されている。それによれば、狩野直喜、内藤虎次郎・乾吉父子、神田喜一郎、武内義雄ら東洋学の研究者たちのみならず、民俗学の柳田国男や作曲家の信時潔、作家の織田作之助との交流も確認できる。今後の書簡類の整理・調査により、石濱の多岐にわたるネットワークを徐々に解明すれば、近代日本における漢学から東洋学などへの発展過程、さらにはそれらと大阪の地域社会との関係（泊園書院や重建懐徳堂の活動など）をも浮き彫りにすることが期待できるだろう。本稿もその試みの一端である。

## 1. 書簡の内容と説明

ここで紹介する大正10年（1921年）10月7日付け書簡1通と翌8日付け葉書1枚は、日本における東洋史学の開拓者の一人である桑原隲藏（じつぞう）（1870-1931）が、代表作となる『蒲寿庚の事蹟』の改訂にあたり、パスパ文字による漢字音表記について、関係業績のある石濱に問い合わせたものである。桑原の論著作成の具体的な手法、これまで知られなかった桑原と石濱の関係が分かる点で貴重なものである。

大正10年当時、京都帝大の東洋史学の教授であった桑原は、論文「蒲寿庚の事蹟」の連載を終えて、改訂に携わっていた。[5] 石濱は、明治44年（1911年）に東京帝大支那文学科を卒業した後、大阪に戻り、漢学やモンゴル・中央アジア史関連の研究を次々と発表していた。また自身が参加していた大阪の文会（漢文学の同人団体）「景社」と京都の文会「麗澤社」との合同会（大正4年･1915年）をきっかけにして、石濱は内藤湖南（虎次郎）をはじめ京都の東洋学者たちと出会っていた。[6] なお石濱が大阪外国語学校蒙古語部に専科委託生として入学するのは、書簡の翌年大正11年4月である。

書簡1通は巻紙に毛筆で縦書きの候文。それを納めた封筒の中に、ペンで縦書き･候文の葉書1枚が入っていた。どちらも京都岡崎の桑原の自宅から大阪住吉の石濱の自宅あてで、消印から大正10年のものと分かる。書簡・葉書の内容を以下に示す。なお、｛ ｝内の部分は、桑原自身による挿入を示す。葉書での［　］内の *k*，*k*‘，*h* の部分はパスパ文字で書かれている。改行は翻字にあたり新たに施したものである。

**********

【大正10年（1921年）10月7日付け書簡】

拜啓　秋冷之候　愈御健勝のことと遙賀奉り候　叉手　唐突ながら左の件につき御示教を得たく　この書面差出し候

元時代のMarco PoloやAbulfeda等は今の杭州をKingsai又はKhansa等と稱し候が、こは行在の音訳なるべしといふ説　我が國にて唱へられ、現に小生もその賛成者の一人と候が、之には當然の順序として先づ行の音のKang（Khang）又はKing（Khing）なることを立證する必要ありと存じ候。

御承知の如く今日の支那音にては行はHang又はHsingに候なり。されば南宋時代　又は元初には｛尠くも江浙地方にては｝行のInitial SはHよりもK又はKhなることを証明する必要有之候。その方法としては　この時代に於ける漢字と外國文字との對音を調査いたすが一番確實と考へ手許に在る一二　元代の｛漢蒙（八思巴文字）の｝聖旨碑を調べし所にては行はやはりHの頭音にてKにもKhにもあらざる様にて（尤も小生はこの方面の調査には餘り自信を有し居らず）一寸失望いたし居り候。

貴台はこの方面の研究には造詣深き筈に候へば　ご迷惑とは察し候へども　左の件一應　御調査御指示願度候

(I) 南宋又は元時代に｛南支那、北支那何れにても｝行の音のKang（Khang）又はKing（Khing）なりしといふ証拠無之候歟。若し証拠見當り候はば　御指示願いたし（西夏文字との對照にても　チベット文字との對照にても）

(II) 支那の廣韻 集韻等によれば行の頭音は戸 又は胡と同一の筈に候。若し直接 行の音見當らざる時は 戸又は胡の｛宋元時代の音は｝K又はKhなる証拠だに見當らば　間接に行の頭音のK又はKhなることを証明し得るかと存じ候。

(III) これは直接の問題とは少しく離れ候へども、汗、干、寒、胡、戸 等はもとK又はKhなりしならんと思はれ候が、今日にては皆H音と相成り

居り候。この変化の｛起りし｝時代はやがて行の音が今日のH音に変りし時代と一致する筈と存じ候。支那字音の沿革歴史には可なり注意を要する重大事件と存じ候　質問の件は即ちこの重大問題に関係する筈と存じ候

右御回答に接し度如此に候　頓首

十月初七　　京都

桑原隲藏

石濱學士殿

案下

**********

【大正10年（1921年）10月8日付け葉書】

拝啓　昨日質問の書面差｛上｝置き候、が、その後大正六年四月の史林に掲載せられたる貴論文　　元國書官印　　を拝見いたし候が、右のうち戸にqu、河にqo、湖又は胡にquを當てら（ママ）たる、Qは八思巴文字の［k］か［*k*‘］か何れのTranscriptionに候か、序に御指示願上候。行は小生の取調べたる漢蒙對字碑には何れも‘H［*h*］と相成り居り候。されど愚考にては　これは元時代の北支那の音なれば、中央又は南方支那にてはK又はKhに近き音を有せしならんと存じ候。右　御垂示を得度如此に候　頓首

京都

十月八日　　桑原隲藏

目下手許に羅氏の著書なし。

**********

桑原からの書簡と葉書の内容は、『蒲寿庚の事蹟』中の「キンサイ＝行在」説の立証のための問い合わせである。次のように要約できよう。マル

コ・ポーロ『東方見聞録』やアブー・アルフィダーの地理書[7]に、現在の杭州をキンサイ（Kingsai）ないしハンサー（Khansa）などと記しているが、それらが「行在」（天子の行幸先の所在の意）の音訳だと主張したい。そのためには、「行」の漢字音が“King”ないし“Khan”であったことを立証する必要がある。だが現代漢語で「行」の音が“Hang”（ピンインでháng）、“Hsing”（ピンインでxíng）ということが障害になる。元時代（13～14世紀）のパスパ文字で音訳された漢文の聖旨碑刻3通により「行」字の頭音表記を調べたが、いずれもHであった[8]。そこで、(I)：「行」字の漢字以外の文字での転写例はないか、(II)：「行」と頭音が同じ漢字で立証しうるか否か、(III)：「行」字の頭音がK，KhからHへ変遷するとの推測はどんなものか、（葉書）：パスパ文字で漢語の官名を刻んだ元時代の官印を紹介した石濱の「元国書官印」[9]で「行」字が“qu”と転写されているが、Qはパスパ文字のどれなのかをうかがいたい。

「キンサイ＝行在」説の主張については、背景の説明が必要だろう。マルコ・ポーロ『東方見聞録』の当時の権威ある研究であった、ポーチエによる古フランス語テキストやユールの英訳に付された註では、「キンサイ＝京師」説が主張されていた。それに対し、当時の日本を代表する東洋学者、那珂通世（1851-1908）、藤田豊八（1869-1929）、桑原隲藏の三人が前後して各々独自に「キンサイ＝行在」説を表明し、藤田と桑原の論争も展開されていた。桑原は那珂と藤田が看過した「行」の漢字音の点から自説を補強し、「キンサイ＝京師」説を確固としたものにしようとしていたのである。[10]自ら碑刻など新出資料や韻書から考証するばかりでなく、若手研究者であった石濱に直接問い合わせるなど、関連の新出研究を積極的に利用する方法が見てとれる。

以上の桑原が書簡と葉書で問い合わせた内容は、構成もほぼその通り『蒲寿庚の事蹟』改訂版に反映されている。[11]石濱が「元国書官印」では

“qu”と転写していた部分は、“q(χ)u”と変えられているので、石濱が何らかの回答をしたのは確かである。ただ結局のところ、その部分も含めて決定的な証拠は見いだせず、改訂版でも「予は必ずしも従来の京師説を全然否定せんとするものにあらず。されど当時の記録等に稽えて、より以上に行在説を主張するものなり。」と歯切れの悪い結論となっている。

実は「キンサイ＝行在」説をめぐる問題は、桑原が苦心した「行」の漢字音も含めて、森安孝夫の研究により近年ようやく、ほぼ解決を見ている。[12)]「キンサイ＝行在」説は定説となったと言ってよい。現在むしろ検討すべきは、桑原はじめ那珂・藤田という当時の日本の東洋史学を代表する三人が、「キンサイ＝行在」説を自らの創見として競い合い、考証にエネルギーを注いだのはなぜだったのかということである。その背景には、日本におけるマルコ・ポーロ『東方見聞録』の受容と研究の歴史がある。またこの書簡に見える桑原との関わりも含めて、石濱をめぐる学術ネットワークのその後の中に『東方見聞録』の研究を担っていった人物たちの活動もたどることができる。[13)]

そこで、次に桑原、石濱をめぐる人々と『東方見聞録』研究に関わる学術史の素描を試みたい。石濱は遺した著述のみならず、その蒐集した膨大な資料と彼をめぐるネットワークを通じて、関わった諸分野の研究を進める役割を果たしたことに注目すべきと考えるためでもある。

## 2. 背景とその後の展開ー石濱をめぐる学術ネットワークとの関わり

### (1) マルコ・ポーロ研究の特色

日本におけるマルコ・ポーロ『東方見聞録』の受容と研究の歴史をたどるには、まずヨーロッパ近代におけるマルコ・ポーロの特別な地位を知る必要がある。19世紀以降の欧米のアジア進出という時代背景、オリエンタリズム的な視線のもとで、マルコ・ポーロの“英雄”化がなされたとい

える。つまり、“ヨーロッパ人が先駆けて「世界」を発見する”という図式のもとで、彼は“大航海時代”のコロンブスの先駆者として、13世紀に新たな「世界」（アジア）に乗り出して、モンゴル帝国（大元ウルス（元朝）の大カアン、クビライのもと）で高い地位を得て活躍し、帰国後にその「世界」をヨーロッパに紹介した人物だというものである。そして、マルコ・ポーロという個人が、彼による新たな「世界」の情報である『東方見聞録』（その書名のひとつは「世界の記述」/ *The description of the world*）の中に記されるアジアの各地を実際に行き、記される通りの地位に就いて活躍し、帰国後に彼の口述筆記の形で『東方見聞録』の祖本が作られたということが、現在にいたるまで前提となってきたと考えられる。[14)]『東方見聞録』の研究も活発化した。記述の信憑性をいうマースデンの英訳注の刊行（1818年）に始まり、パリの地理学協会によるフランス国立図書館蔵古フランス語写本（fr.1116）に依るテキストの刊行（1824年）、バルデリ＝ボニによる原著が古フランス語であることの発見（1827年）、ポーチエによる古フランス語テキストと詳細な注の刊行（1865年）、そのテキスト等に基づいたイギリスのユールによる英訳と漢文史料をも用いた詳細な註（1871, 1875年）及びフランスのコルディエによるその補注（1903, 1920年）の刊行が相次いだ。[15)]

では日本においては、マルコ・ポーロはどのように受けとめられたのか。ヨーロッパ近代での特別な地位に加えて、新たに別個の価値が付与されたといえる。それは、“日本のことを初めてヨーロッパに紹介した”人物としての評価である。『東方見聞録』中のいわゆる「ジパング＝黄金の国」の記述と蒙古襲来を撃退したとの記述の部分が、特に幕末から明治期における日本のナショナリズムと、その一方での欧米志向の双方から歓迎されたためと考えられる。日本におけるマルコ・ポーロについての知識の最初は、志筑忠雄によるケンペル「日本誌」付録の訳『鎖国論』（1801年。

「鎖国」の語の初出として著名）の中のマルコ・ポーロの紹介である。松平定信が注目し、国学者の伴信友は『鎖国論』のこの箇所を著作に引用して検討している。さらに幕末になって『鎖国論』は『異人恐怖伝』の題名でも出版されて流布した。明治期に入ると三宅米吉、坪井九馬三はじめ多数の知識人がジパングの記述に注目するにいたった。[16] 現在にいたる日本でのマルコ・ポーロと『東方見聞録』への高い関心はここに始まる。

### (2)「キンサイ＝行在」説を提唱した三人

那珂通世、藤田豊八、桑原隲藏ら三人は、上記のような近代のヨーロッパと日本でのマルコ・ポーロの特別な地位と関心の下で、「キンサイ＝京師」説に対抗して「キンサイ＝行在」説を主張した。ヨーロッパでのマルコ・ポーロ『東方見聞録』研究の新たな蓄積、特にユールの英訳注とコルディエによる補注は画期的であり、彼らにも圧倒的なものに見えたであろう。まだ『東方見聞録』そのものの全面的な研究はまだ難しい。そこで、ユールらの先進的な研究を紹介し、さらにその中での解釈について、自らの特長を活かして反論するという形で研究に参入した。[17] 自らの特長とは、江戸時代以来の漢学の蓄積による漢文史料のより高度な利用と、新たな多言語史料の利用（本件ではパスパ文字資料）であろう。単なる一地名の比定という以上の意味がそこにはあり、日本でのマルコ・ポーロ『東方見聞録』研究の一画期でもあった。ジパングの箇所の紹介を超えて、ヨーロッパの先進研究の当否を検討する段階に至ったのである。

### (3) 羅振玉と羅福成

桑原から石濱への葉書の末尾には「目下手許に羅氏の著書なし。」の一文がある。羅氏の著書とは、羅振玉が1916年秋に刊行した隋唐から明までの官印の印譜『隋唐以来官印集存』である。その中からパスパ文字が

刻まれた元代の官印を紹介したのが、石濱の「元国書官印」（大正6年4月·1917年）で、それが桑原の目に止まったのだった。甲骨文字、敦煌文献の研究でも知られる羅振玉（1866-1940）は、辛亥革命の後に亡命して、当時は京都に在住しており、内藤湖南、桑原隲藏ほか京都帝大の東洋学者たちとの交流も盛んであった。[18] 石濱はこうした京都での学術ネットワークに参加する中から『隋唐以来官印集存』を刊行直後に入手し得たものと思われる。

桑原が「貴台はこの方面（「漢字と外國文字との對音」）の研究には造詣深き筈」と記すように、石濱は甲骨文字からの漢字そのものと、パスパ文字やさらには西夏文字の研究に関心が強かった。それが内藤湖南の欧州調査旅行への随行時における、大英図書館所蔵の『蒙古字韻』（パスパ文字と漢字の対音資料）写本の撮影写真の将来[19] につながる。また石濱文庫には、羅振玉の長子の羅福成からの西夏文字の研究に関わる書簡が残り、羅氏一家の帰国（大正8年·1919年）の後も長く研究面での交流が続いていたことがうかがえる。

### (4) ロシア・ソ連東洋学への橋渡し

石濱が西夏文字の研究に打ち込み、大阪外国語学校在学時に知り合ったニコライ・ネフスキーとともに共同研究を著したことはよく知られている。[20] ソ連に帰国したネフスキーから石濱に宛てた書簡（1930年11月10日付）には、次の一節がある。「桑原先生著「蒲寿庚の研究」の英訳をクラチコフスキ教授が見たいと仰しやいましたが、小生は自分の奴を故バルトルド先生に進上致しましたから、小生も有（ママ）つてませんからどうもする事が出来ません。その一冊だけでもクラチコフスキ教授に御送附する様に東洋文庫に頼んで下さいませんかお願ひ致します」。[21] ソ連の東洋学者の間での石濱の評価は高く、アカデミー通信会員に推薦しようとする動きもあっ

た。[22] 石濱とネフスキーのつながりが、日本とソ連の東洋学（日本民俗学も含む）の交流の要となっていたことの証左のひとつである。

### (5) 石田幹之助との交流

モリソン文庫から設立当時の東洋文庫で主任・主事を務めた東洋学者石田幹之助と石濱純太郎とは、戦前戦後を通じて長い学術交流があった。それは、石濱文庫に残る石田書簡をもとに岡崎精郎氏によって明らかにされている。[23] 二人の交流の初期（昭和2年・1927年）当時から、石濱と石田とが東洋学の若手としても注目されていたことも、新聞記事から確認できる。[24]

この石田と後に東洋文庫理事長を務めた榎一雄らの尽力により東洋文庫に『東方見聞録』関連の文献が収集されていったことは特筆すべきである。石田と榎には『東方見聞録』の書誌学的また歴史研究がある。[25] また榎の委嘱により渡邊宏が、1477年以来各国で刊行されたマルコ・ポーロ『東方見聞録』およびそれに関連する各種の文献1617件を収録した『マルコ・ポーロ書誌1477-1983』を編纂し、東洋文庫から刊行されたことは、日本に限らずマルコ・ポーロ研究に大きく貢献するものであろう。[26]

### (6) マルコ・ポーロ研究の新展開

那珂、藤田、桑原らが「キンサイ＝行在」説を主張したのは、ユールとコルディエによる新研究に対応したものであった。その次の『東方見聞録』研究の画期は、イタリアのベネデット、イギリスのムールとフランスのペリオらによってなされた。ベネデットは、『東方見聞録』諸写本の新研究と新見解、フランス国立図書館蔵古フランス語写本（fr.1116。いわゆる地理学協会本）を底本とする新たな校訂テキストを刊行した（1928年）。ムールとペリオは共編で、同じ写本（fr.1116）を底本としつつ諸写

本からの情報を統合したテキストの英訳、および他の重要なラテン語テキストを刊行した（1938年）。[27] 日本でいち早くそれらの新展開に対応した研究を行ったのが、後に敦煌学で著名となる藤枝晃（1911-1998）であった。藤枝の最初の本格的な業績は、ベネデットの新研究の本格的な紹介論文「マルコ・ポーロ旅行記の近刊諸校注本に就いて」（1938年）から始まり、ムールとペリオ共編の研究の紹介および「マルコ・ポーロの伝へた蒙疆の事情」（1939年）と続いた。[28]

この藤枝も石濱純太郎の学術ネットワークに繋がる一人である。石濱の住吉の自宅は「石濱サロン」と称され、藤澤章次郎の子で、石濱の甥にあたる藤澤桓夫や石濱の長男の恒夫ら作家が集っていた。藤枝は帰省の度にそこに出ていたと語っている。[29] 石濱と藤枝とも敦煌学やモンゴル帝国史の研究を手がけた点でも共通点がある。[30] 藤枝が大阪高校在学時、石濱が出講していたため二人の接触がそこから始まったか、または石濱の大阪外国語学校在学時に出講していた羽田亨（京都帝大の東洋史学教授）が、共通の師として接点となった可能性もある。

さて藤枝は一時マルコ・ポーロ研究から離れるが、戦後1960年代後半からフランス語学を専門とする大橋保夫（1929-1998）らとともに、ベネデットによる校訂テキストの読解に取り組みはじめた。このテキストは北イタリアで使われたfranco-italianとも称される難解な古フランス語で書かれているが、『東方見聞録』の現存諸写本の中で最古かつ最重要とされるものである。日本で初めて『東方見聞録』原典の読解に本格的に取り組んだ点で画期的であった。[31] 藤枝が敦煌学ほかに研究の重点を移したために、この研究は中断し、その後は大橋が主に取り組むことになったようである。

大橋は、後に1985～1986年の研究でヨーロッパ各地の重要な古写本研究、テキストの言語研究に取り組み、今後あるべき研究の指針を見極めた

段階までいたる。[32] だが惜しくもそれらの成果を発表する前に逝去したため、大橋の残した研究指針は、後学の課題として残されることになった。

## おわりに

以上述べたほかにも、日本におけるマルコ・ポーロ『東方見聞録』研究の歴史には挙げるべきことが多数ある。たとえば、現在でも一番詳しい日本語の訳注として参照される東洋史学の愛宕松男による漢文史料を駆使した訳注（1970～1971年）があり、イタリア文学の高田英樹にはラムージオ、ベネデットによる『東方見聞録』写本研究の詳細な紹介がある。[33] 近年では、中世フランス文学の月村辰雄と久保田勝一による『全訳マルコ・ポーロ東方見聞録』（2002年）が、古フランス語原典から初めて直接日本語訳した点で研究史上、画期的な業績としてあげられる。[34] また東洋史学の杉山正明は『東方見聞録』中の「マルコ・ポーロ」なる一個人の存在への疑問を投げかける形で『東方見聞録』研究の根底からのやりなおしを呼びかけている。[35] これらの研究が上述の研究の系譜にどう繋がるかは、管見の限りでまだ詳らかではない。

桑原が石濱に書簡で問い合わせてから90年後の現在、少なくとも日本でのマルコ・ポーロ研究の環境は全く異なったものになった。マルコ・ポーロが活躍したとされるモンゴル帝国時代（13～14世紀）の歴史研究は、東洋史・西洋史・日本史ほか関連の諸分野とも長足の進歩を遂げつつある。『東方見聞録』を原典から読むことのできる学習環境（古フランス語、中世ラテン語、イタリア語）も整った。諸写本およびそれらの言語の研究の方向付けもなされた。だがマルコ・ポーロ研究には多分野にまたがる知識・技能が求められる一方、一人の能力・時間では及びがたい面も出てきている。そこで今後に強く望まれるのは、江戸時代以来の日本でのマルコ・ポーロと『東方見聞録』への高い関心を背景として、石濱がめぐらせたよ

うな歴史・地理学・文学・語学ほかを横断する学際的かつ国際的なネットワークと、そこに関わる人々の『東方見聞録』研究への志であろう。

**注**

1）石濱純太郎と石濱文庫の概要については、『大阪大学図書館報』vol.43 no.3（通巻170号）、2010年の拙文「懐徳堂文庫に続く大阪の東洋学コレクション ── 石濱文庫の再調査にむけて ── 」参照。

2）『大阪外国語大学所蔵石濱文庫目録』大阪外国語大学附属図書館、1979年。この目録は、1977年に刊行された同名の目録に索引を加えた増補版である。本文の内容にも一部（写真の部など）相違がある。

3）『石濱文庫の学際的研究 ── 大阪の漢学から世界の東洋学へ ── 』平成23年度文学研究科共同研究・研究成果報告書、研究代表者堤一昭、2012年3月。なお次に言及する平成24年度のものも含め、計画内容は文学研究科・研究推進室のサイトで参照可能。

4）加藤九祚『完本・天の蛇』河出書房新社、2011年。生田美智子『資料が語るネフスキー』大阪外国語大学、2003年、および上記の平成23年度の成果報告書。岡崎精郎「「支那学」創刊前後 ── 青木正児博士の書翰をめぐって ── 」『神田喜一郎博士追悼中国学論集』1986年；「サハリン（樺太）ギリャク族調査行 ── 高橋盛孝博士の業績の一端について ── 」『追手門学院大学東洋文化学科年報』2、1987年；「石濱・石田両博士学術交流記録抄」『古代文化』35-8、1983年；「同（続）」『名古屋学院大学論集社会科学篇』20-2、1983年；「同（三）」『追手門学院大学東洋文化学科年報』3、1988年。

5）「桑原隲藏略年譜」「著作目録」および森鹿三「解説」『桑原隲藏全集 第五巻』岩波書店、1968年。当書簡に関係する部分は連載の第一回（『史学雑誌』26-10、大正4年・1915年）の註13（pp.22-25）。

6）「石濱純太郎先生著作目録」「年譜略」『石濱先生古稀記念東洋学論叢』同古稀記念会、1958年。書簡の文面からすると既に面識はあったようだが、桑原は文会の類に積極的ではなかった（「座談会「先学を語る」桑原隲藏博士」『東方学』49、1975年での子息・武夫の発言。p.8）ので、石濱との接点がいつからなのかは未詳。これまで石濱は内藤湖南との関わりのみが注目されてきたが、桑原とも学術面での直接のやりとりがあったことは注目される。桑原は、石濱の卒業した東京帝大支那文学科の前身たる漢学科出身（明治29年・1896年の卒業）のため、先輩後輩の誼もあったかも知れない。

7）佐藤次高「アラブ（後期）」『アジア歴史研究入門4』同朋舎出版、1984年、

p.584参照。今回、アラブ語史料利用の問題は扱わない。

8）改訂版の『蒲寿庚の事蹟』（注9参照）によれば、(1)「加封孔子制詔碑」（大徳十一年九月［三月は誤り］、山東曲阜）、(2)「加封鄒國亜聖公聖旨碑」（至順二年九月、山東鄒縣）、(3)「崇奉孔子詔」（至元三十一年七月、江蘇松江）の三碑。桑原は清国留学中の中国各地の現地調査に際して、多くの碑刻の拓本を採取・収集し、それらを利用するという新たな研究手法を用いている。特に歴史資料として漢字以外の文字（パスパ文字、女真文字）が刻まれた碑刻に留意していることは注目すべきである。その現地調査報告が『考史遊記』（『桑原隲藏全集 第五巻』岩波書店、1968年所収）であり、ここで用いた碑刻の内(1)(2)について言及がある。彼の収集拓本は京大人文科学研究所が所蔵し、(1)(2)は同研究所附屬漢字情報研究センターの「石刻拓本資料（文字拓本）」データベースで画像が確認できる。

9）石濱純太郎「元国書官印」『史林』2-2、大正6年（1917年）。

10）那珂、藤田、桑原の「キンサイ＝行在」説の先後関係や後二者の論争については、森鹿三「解説」『桑原隲藏全集 第五巻』岩波書店、1968年のpp.527-533に詳しい。

11）『宋末の提挙市舶西域人蒲寿庚の事蹟』上海、東亜攷究会、大正12年（1923年）、註21（pp.35-41）。しかし、ここで石濱の「元国書官印」の所載雑誌名『史林』を『藝文』と誤記しているため、これまで石濱の著作に言及していたことが分からなかった。それは桑原没後に刊行された増補版（岩波書店、1935年、pp.27-31）も、それに拠った全集（『桑原隲藏全集 第五巻』岩波書店、1968年、pp.45-49）でも同様である。

12）森安孝夫「敦煌出土元代ウイグル文書中のキンサイ緞子」『榎（一雄）博士頌寿記念東洋史論叢』汲古書院、1988年、pp.427-432。『東方見聞録』などヨーロッパ側の記録の、現存する様々な写本・刊本において、アジアの固有名詞や術語がどのような綴字で記されてきたのかという問題は残る。この問題は、古くはIvar Hallberg の*L'Extrême Orient dans la littérature et la cartographie de l'Occident des XIIIe, XIVe et XVe siècles : étude sur l'histoire de la géographie*, Göteborg, 1906が著名だが、その後の展開については残念ながら詳らかでない。

13）石濱自身はマルコ・ポーロ研究を手がけなかったが、石濱文庫にはポーチエのテキスト・注（1865年）、ユールによる英訳註（1903年第3版）、コルディエの補注（1920年）、後述するムール、ペリオによる英訳など（1938）およびラムージオの刊行テキストの写真などがあり、関心は持ち続けていたようである。

14）たとえば、以下に挙げるような19世紀以降の校訂テキスト、訳注、研究書等の書名もその前提を物語る。ポーチエによる古フランス語テキストPauthier, J. P. G., *Le livre de Marco Polo citoyen de Venise*「ヴェニスの市民マルコ・ポーロの書」, Paris, 1865は、この書名の前には漢字で「忽必烈枢密副使博羅本書」（クビライの枢密副使である”博羅”の本書（?））、後にはそれを説明する意図か“conseiller privé et commissaire impérial de Khoubilaï-Khaân（クビライ・カアンの私的顧問かつ帝国官吏）”が付されている。マルコ・ポーロを『元史』にあらわれる枢密副使の博羅という人物に比定する意図がある。博羅が“Polo”であり得ないことは、現在は常識となっている。*The travels of Marco Polo*「マルコ・ポーロ旅行記」*: the complete Yule-Cordier edition : including the unabridged third edition*（*1903*）*of Henry Yule's annotated translation, as revised by Henri Cordier, together with Cordier's later volume of notes and addenda*（*1920*）, New York, 1993は、ユールの英訳註とコルディエの註釈の統合版。マルコ・ポーロの伝記であるHenry H. Hart, *Venetian adventurer*「マルコ・ポーロ：ヴェネツィアの冒険家」*: being an account of the life and times and of the book of Messer Marco Polo*, 1942（幸田礼雅訳、新評論、1994年）。『東方見聞録』誕生の経緯・目的、受容の歴史を探る研究書であるJohn Larner, *Marco Polo and the discovery of the world*「マルコ・ポーロと世界の発見」,1999（野崎嘉信・立崎秀和訳、法政大学出版局、2008年）。Frances Wood, *Did Marco Polo go to China?*「マルコ・ポーロは本当に中国に行ったのか」, London ,1995（粟野真紀子訳、草思社、1997年）。ただし、著者はあとがきの最後では、書名に表れる前提を疑うような「マルコ・ポーロと東方見聞録、このふたつは別物で、切り離して考えるべき、そう考えてはじめて、このテクストを新しい目で検討することができるようになるのだと思います」（和訳p.189）との結論に至っている。

『東方見聞録』を従来からの前提なしに読めば、マルコ・ポーロ一家の活躍（教皇の使節、フレグ・ウルスへの使節、揚州の長官等々）、キリスト教的価値観から見た異国の珍奇な事物、イスラム圏に古くから伝わる伝説（食人国など）といういくつかの外被の下に、クビライ時代のモンゴル帝国、特に大元ウルス中枢の諸制度や事件、治下の「中国」など諸地域の状況、またフレグ・ウルスの政治状況などの史料的価値の高い中核の記述が記されるという構造が見えてくる。『東方見聞録』の「中国」地域の記述の構造が特異であるとの指摘と、その点についての筆者のコメントは、月村「中世フランス語のマルコ・ポーロ」『図書』2002年4月号、p.11、堤「「中国」の自画像」、西村成雄・田中仁編『現代中国地域研究の新たな視圏』、世界思想社、2007年、p.59参

照。なお松田孝一は、大元ウルス中枢の諸制度や事件のペルシア語訳が『東方見聞録』の情報源となっている可能性を述べている（「『東方見聞録』のなぞ ── モンゴル帝国史話（中） ── 」『月刊しにか』152号、2002年9月）。

15）前掲ラーナー（Larner）、野崎・立崎訳『マルコ・ポーロと世界の発見』pp.293-299。渡邊宏「マルコ・ポーロ「世界誌」研究入門」『季刊東西交渉』創刊第3号、1982年秋の号、1982年、pp.20-21。

16）渡邊宏「日本におけるマルコ・ポーロ I」『（東洋大学）アジア・アフリカ文化研究所年報』1975年。“権威のある他者による記述に日本がどう書かれているか”に関心が集中する点では、陳寿『三国志』中の一箇所が、日本で「魏志倭人伝」と名づけられ、集中して読まれてきたこととも共通するだろう。

17）藤田はいち早くユールの英訳注についての補正を試みており、桑原もユールの別の研究（*Cathay and the way thither*）の紹介を行っている（注10参照）。なお、先進のヨーロッパでの“科学的な”歴史研究を追求するという、当時の日本の東洋学の姿勢には、ヨーロッパの東洋学の枠組みそのもの（オリエンタリズム的な視線など）や自己のアジアに対する視線についての批判的な面は希薄である。この点については、吉澤誠一郎「東洋史学の形成と中国－桑原隲藏の場合」岸本美緒編『岩波講座「帝国」日本の学知 第3巻 東洋学の磁場』岩波書店、2006年参照。

なお、石濱が師と仰いだ内藤湖南を通じて那珂通世は蒙漢バイリンガル史料である『元朝秘史』を入手し、世界初めての訳注『成吉思汗實録』（明治40年・1907年）を著している。石濱自身も『元朝秘史』に関する研究を発表している（「元朝秘史蒙文札記1～3」『東亜研究』5-6～8、大正5年・1916年ほか）。また石濱の義兄の藤澤章次郎（黄坡）が東京高等師範学校国語漢文専修科に在学中（明治28～29年・1895～96年）、那珂は同校教授であった（「泊園書院年譜」吾妻重二編『泊園書院歴史資料集』関西大学東西学術研究所、2010年）。石濱は内藤、藤澤らから生前の那珂の学問について聞いていた可能性がある。

18）礪波護「羅・王の東渡と敦煌学の創始」、白州浄眞「大谷光瑞と羅振玉」高田時雄編『草創期の敦煌学』知泉書館、2002年。『隋唐以来官印集存』は石濱文庫に現存するが、書き込みなどはない。桑原の旧蔵書「桑原文庫」（京大文学研究科図書館蔵）にこの書はない。

19）石濱は『蒙古字韻』を写真の形で関係者に資料提供していたが、後に写真版が刊行された（関西大学東西学術研究所、1956年）。

20）前掲加藤九祚『完本・天の蛇』第八章西夏語の研究、第十章帰国後の活動、付録一回想のネフスキー（四）石浜純太郎。

21）前掲加藤九祚『完本・天の蛇』pp.230-232。東洋文庫から昭和3年（1928年）

に出された『蒲寿庚の事蹟』英訳版 *On P'u Shou-Kêng*（蒲寿庚）は、石濱の「元国書官印」への言及が含まれた改訂版（東亜攷究会、大正12年（1923年））に基づくもの（「著作目録」p.552、前掲『桑原隲藏全集 第五巻』所収）。アラブ学のクラチコフスキー（И.Ю. Крачковский）の業績については前掲『アジア歴史研究入門4』の間野英二「トルキスタン」p.67、森本公誠「アラブ（前期）」p.551などを参照。

22）生田美智子「石濱純太郎宛ネフスキー書簡」（注3の『石濱文庫の学際的研究』所収）。石濱文庫には、未調査のソ連東洋学者（シュツキーほか）からの書簡や、受贈の抜き刷りがある。既に紹介されたものも含めた目録作成から始めて、さらに既存のネフスキー研究との総合が待たれる。それらにより、未解明の部分も多い戦前期の日ソの東洋学の学術交流が描き得るだろう。

23）前掲「石濱・石田両博士学術交流記録抄」（注4参照）。

24）『東京日日新聞』昭和2年6月22日「学界新風景（19）東洋学の三人男　隠れた学者石濱氏」（堤「石濱純太郎を紹介する新聞記事2件」（注3の『石濱文庫の学際的研究』所収）には、内田魯庵の述懐により石濱の活動が紹介されるほか、石田、羽田亨が紹介されている。

25）石田「マルコ・ポーロ「東方見聞録」の古刊本二種」『石田幹之助著作集 第三巻』六興出版、1986年。榎のマルコ・ポーロ研究は、『榎一雄著作集6東西交渉史III』汲古書院、1993年に収められている。なお注12で挙げた森安孝夫もフランス留学より帰国後、東洋文庫に学振奨励研究員として在籍（1981年）しており、東洋文庫でのマルコ・ポーロ研究の系譜に繋がると考えられる。

26）渡邊宏「自編を語る：渡邊宏編『マルコ・ポーロ書誌1477-1983』」『季刊東西交渉』1986年夏号、pp.38-39。渡邊には注16でふれた「日本におけるマルコ・ポーロ」I（～IV）のほか、『（東洋大学）アジア・アフリカ文化研究所年報』『東洋文庫書報』『季刊東西交渉』にマルコ・ポーロ『東方見聞録』関連の論考を多数発表しており、それらを総合した単行本化が待たれる。

27）Luigi Foscolo Benedetto, *Marco Polo Il Milione*, Firenze, 1928; A.C. Moule & Paul Pelliot, *The description of the world / Marco Polo*, London, 1938. なおペリオによる『東方見聞録』中の地名・人名・事項名についての註釈である *Notes on Marco Polo I-III*（1957～73年）、ムールによる「キンサイ」についての詳細な研究の増補版 *Quinsai with other notes on Marco Polo*（1957年）は、いずれも第二次世界大戦後の刊行である。

28）藤枝晃「マルコ・ポーロ旅行記の近刊諸校注本に就いて（上）（下）（補遺二則）」『東洋史研究』3-3,3-5,4-3、1938～39年。「（紹介）ムール＝ペリオ共編マルコ・ポーロ「世界事情」第一・第二巻」『史林』24-2、1939年。「マルコ・

ポーロの伝へた蒙疆の事情」『東洋史研究』4-4･5、1939年。「昔児吉思その他－「マルコ・ポーロの伝へた蒙疆の事情」補正」『東洋史研究』5-1、1939年。

29）藤枝晃「町人学者・石濱純太郎」『図書』234号、1969年2月。

30）「石濱純太郎先生著作目録」（注6参照）。「藤枝晃教授著作目録」『東方学報京都』49、1977年。藤枝の『征服王朝』秋田屋、1948年は、金・元時代の歴史に関わる論考を集めている。

31）藤枝晃「ほんとの出会い：マルコ・ポーロとの格闘」『毎日新聞』1973年6月18日読書欄。なお大橋は、レヴィ＝ストロース『野生の思考』の翻訳でも知られる。

32）科学研究費助成データベースKAKEN「マルコ・ポーロ『東方見聞録』原典の研究、研究課題番号：60510253、1985年度～1986年度、大橋保夫（京大・教養部・教授）」（http://kaken.nii.ac.jp/d/p/60510253.en.html）大橋も原本に最も近いと考えるフランス国立図書館蔵写本（fr.1116）については、ベネネットより後にも、ロンキの校訂本（Gabriella Ronchi, Milione: Le divisament dou monde, Milano, 1982）が出された。だが、その校訂にも問題があるためか「精密な転記」が必要としている。

33）愛宕松男訳注『東方見聞録』（平凡社東洋文庫158, 183）、平凡社、1970-1971年。高田英樹「ラムージョ「マルコ・ポーロの書序文」(1)『愛媛大学教養部紀要』24-1, 1991年、「同（3）」『大阪国際女子大学紀要』24-1, 1998年；「ベネデット『マルコ・ポーロ写本』（一）～（六-2）『大阪国際女子大学紀要』24-2～27-1, /『国際研究論叢：大阪国際大学紀要』16-2, 17-1, 1998～2003年。高田の研究の概要は、京都大学学術情報リポジトリ紅：学位論文「マルコ・ポーロ研究」参照。

34）月村辰雄、久保田勝一本文訳『全訳マルコ・ポーロ東方見聞録：『驚異の書』fr.2810写本』岩波書店、2002年。これは、15世紀初、ジャン無畏公からベリー公ジャンへ贈られた豪華な挿絵で名高いフランス国立図書館蔵fr.2810写本『驚異の書』の『東方見聞録』部分の日本語訳である。テキストの系統はポーチエのものと同じFG本である。月村、久保田訳『マルコ・ポーロ東方見聞録』（岩波書店、2012年）は、日本語訳本文と訳者あとがきのみを小型版で刊行したもの（挿絵図版は単色で収録）。

35）杉山正明「マルコ・ポーロはいなかった？」（『逆説のユーラシア史』日本経済新聞社、2002年、pp.110-129；『モンゴルが世界史を覆す』日本経済新聞社、日経ビジネス人文庫、2006年、pp.130-150）；「モンゴル時代史研究の現状と課題」（佐竹靖彦編『宋元時代史の基本問題』汲古書院、1996年、p.518）。

（文学研究科准教授）

## SUMMARY

**Two Letters from KUWABARA Jitsuzo in the ISHIHAMA Library: Theories surrounding Marco Polo's Quinsai = Xíngzài 行在**

Kazuaki TSUTSUMI

This paper discusses and analyses the background of the letters (1921) sent to ISHIHAMA Juntaro 石濱純太郎 (1888–1968) by KUWABARA Jitsuzo 桑原隲藏 (1870–1931), both scholars of oriental history. The content of these letter and postcard sent by KUWABARA consists of enquiries seeking to prove the theory that Quinsai = Xíngzài 行在 in *On P'u Shou-Kêng*『蒲寿庚の事蹟』. Insight into KUWABARA's research gained from these letters show characteristics of Marco Polo's first full-fledged studies in Japan. In addition, the purpose behind these letters was an academic network surrounding ISHIHAMA. Therefore, these letters allow us to trace the activities of those within this network who subsequently went on to become key figures in Marco Polo studies in Japan.

The contents are as follows:

Introduction

1. Content of Letters and Commentary
2. Background and Subsequent Development: Ties with the Academic Network surrounding ISHIHAMA

(1) Nature of Marco Polo Studies

(2) The three People who advocated the Theory that Quinsai = Xíngzài 行在

(3) Luó Zhènyù 羅振玉 and Luó Fúchéng 羅福成

(4) Mediating Oriental Studies in the USSR

(5) Dealings with ISHIDA Mikinosuke 石田幹之助

(6) New Developments in Marco Polo Studies

Conclusion